

張愛玲『金鎖記』の中の女性像

吳 小 莉

《Summary》

Women in Zhang Ailing's Novella "the Golden Cangue"

Wu Xiaoli*

This paper introduces Zhang Ailing, a well-known Chinese woman writer who gains a high reputation in the History of Modern Chinese Literature, and describes her well-regarded short novel "the Golden Cangue". Unlike the women writers who appeared after the New Culture May-Fourth Movement (1915-1922) in terms of women's liberation, Zhang Ailing did not focus on the liberated woman. She was more concerned about the ordinary Chinese woman who could never escape from the bondage of tradition and whose inner world had never been influenced by outer forces.

To get to know her further, the second section of this paper introduces Zhang Ailing's legendary life. Born in Shanghai, well-educated and strongly-influenced by both Chinese and Western cultures, Zhang Ailing showed her great talent in writing stories when she was still a teenager. Even after her death in America in 1995, Ailing's fame has remained strong not only in mainland China, but also in Taiwan and Hong Kong.

The third section of the paper describes the roles of women in Zhang's work "the Golden Cangue" which was published in 1943 when she was only twenty-three. The beginning of the section details the women's marital lives. The next part explores the evil side of mother image. The last part concentrates on the complicated mother-daughter relationship which appeared in the novella.

* 研究員

I. はじめに

張愛玲は、中国現代文学史において高い評価を受けている女性作家の一人である。中国現代文学の第一人者である魯迅は、生涯、国民性の批判に力を注ぎ、中国民族の文化的な心理の構造を明らかにした。張愛玲は女性の立場から「女性原罪」という意識に注目し、これを批判することで、この民族の文化心理的な構造の解明を補い、女性意識の進化と発展に貢献した⁽¹⁾。コロンビア大学教授の夏志清によって、張愛玲は、中国現代文学史のなかで魯迅に続く優秀な作家という高い評価を与えられている⁽²⁾。「五四」新文学運動から出てきた女性作家と異なり、愛玲は、経済的、精神的に自立していない女性たちに注目し、彼女たちに深い同情心をもっていた。彼女は、特に惨めで悲しい女性の運命を描いた。

中国の「五四」という新文学運動における、「個性解放」というスローガンが出現すると同時に、中国現代女性文学も誕生した。有名作家である氷心、盧隱、丁玲等は、新しい女性像を求め、古い封建の桎梏・束縛から脱出してきた。彼女たちの作品は、自由結婚を追求、愛情主義を崇拜し、新しい時代の革命に参加した女性を主人公とするところに特徴があった。

現代女性文学における代表作家としての丁玲が作った新しい女性像は、古来からの卑屈で従順な姿ではなく、強い女性意識の覚醒を表現し、全ての社会抗争と自我開放を男性社会との対立上に結集したものであった。丁玲が書いた前期の作品の特色は、男女間の葛藤と衝突である。女性は意識的に男性を変え、社会や制度を改革するため、強い人間になって、自分の一生の幸福と解放を男性への抗争と統治に注いだ。たとえば、『莎菲女士の日記』、『自殺』は彼女の女性意識の典型的な作品であった。

丁玲たちは第一歩を踏み出しただけで、それ以上進むことはできなかったという。「五四」時代の女性文学における女性意識の覚醒は女性自身の追求ではなく、男性意識あるいは超男性意識の追求を目標としたのが、この原因だったのかもしれない。ゆえに、女性の解放と奮闘の最終的な目的は、外部社会から女性の存在を認めさせることになった。

これに対し、1943年に書いた張愛玲の『伝奇』は、「五四」以来の女性文学を新しく広めるという内容であった。

丁玲たちの新女性像と違い、愛玲の書いた女性像は、家庭に生きる中国古来からの普通の女たちだった。彼女たちは、何千年もの間、培われてきた心の地獄の中から脱出することができなかった。時代の変革の波に影響されていない彼女たちは、未来への憧憬がなく、

数千年間続いてきた封建意識のまま、男性の付属品としての存在であった。歴史的に見ると、女性は常に地位が低く、弱い者だった。張愛玲は女性の歴史は哀れむべき女性奴隷の歴史で、それは中国古来の社会制度と女性自身による向上心の欠如が原因であると書いている⁽³⁾。

II. 『伝奇』のような人生

張愛玲は1920年9月に上海で生まれた⁽⁴⁾。彼女の祖母は季鴻章の娘で、清代末期の名臣張佩綸の夫人となった人である。その息子、すなわち愛玲の父に南京の名家から嫁いだ母は、自立心に富んでいた女性だったようで、夫とは折り合いが悪く、幼い愛玲姉弟を残したままヨーロッパへ渡った。愛玲は名門の家に生まれながら、いわゆる家庭的な愛情には恵まれなかったとも言える。封建的な家族という場面設定と、その重圧にあえいでいる人間たち、そして、そこに影を落とす被占領という、時代と場所が張愛玲に与えられたものであった。

数年後帰国した母は、まもなく父と離婚、張愛玲が上海のミッションスクール、聖マリア女学校に入学するころ、再びヨーロッパに向けて旅立った。1937年、卒業と相前後して、帰国した母を訪れたことが原因で、張愛玲と父との関係は悪化し、半年間の軟禁という異常な体験をする。辛くも脱出した後は、完全に父との関係を絶った。母の支援もあり、ロンドン大学へ留学の予定であったが、折しも始まった第二次世界大戦の影響で断念せざるを得ず、やむなく香港大学に入学した。

古いしがらみから自由になった香港での生活は楽しいものだったらしく、インド出身のファティマという女子学生と親しくなり、その後の人生のかなりの時期まで行動を共にする。しかし、それも1941年12月の香港陥落により中断を余儀なくされ、学業半ばにして上海に戻った。その後、香港大学で身に付けた英語力と高校時代から定評のあった文才を生かして、英文雑誌に投稿する。同時に、本格的な執筆活動を開始した。1943年春、彼女が23歳の時、『沈香屑——第一炉香』という小説を初めて発表し、上海の文壇にデビューした。その後、愛玲の小説『金鎖記』、『赤い薔薇・白い薔薇』などが雑誌に相次いで発表され⁽⁵⁾、日本敗戦までの二年間、占領下の上海で脚光を浴びた。

この間、張愛玲は親日的な汪精衛政権に参加していた高官の胡蘭成（1906～81）と関係が親密になり、44年に結婚した。この時期、小説集の『伝奇』の他、散文集『流言』を出版した。結婚生活は、三年間で終止符を打った。

中華人民共和国設立後の1952年、彼女はまず香港へ、そして55年にはアメリカに渡って、翻訳や創作を続けた。香港滞在中に共産主義中国の裏面を描いた長篇小説『赤地の恋』と『秧歌』を発表した。

58年に、左翼作家のドイツ系アメリカ人F・ライア（1890～1967）と二度目の結婚をしている死別し、60年代以後は、創作の代わりに『紅樓夢』の研究に力を注いでいたと聞く。1995年9月にロサンゼルスで孤独の中、亡くなった⁶⁾。

張愛玲は人気作家として、現在でも熱狂的な愛読者を持ち続けており、特に台湾の作家に多大な影響を与えた⁷⁾。中国大陸よりも、台湾、香港で早くから彼女の作品が出版された。そして、80年代に入ってから、中国でも読まれるようになり、研究の成果もあげられている。女性作家としては、中国現代文学史において高い評価を受けている。

上海に生まれ、台湾で人気を博し、アメリカで亡くなった張愛玲は自作『伝奇』のような人生があった。

III. 『金鎖記』の中の女性像

『金鎖記』という作品は上海時代の張愛玲の代表作で、1943年秋に書かれたものである⁸⁾。彼女が23歳の時の作品であり、当時からすでに中国現代文学の傑作の一つという評価があたえられていた。主人公である曹七巧の生活のいろいろな側面から、女性の悲劇が見えてくる作品である。彼女は複数の役を演じていて、家庭での妻として母親としての役割、及び母と娘の関係を経て、女性の疎外された人間性とその複雑な心境を深刻に表現し、特に人間性の暗い面を描いていく。曹七巧は被害者である女の奴隷であると同時に、加害者としての奴隷主でもある。

1. 結婚生活の中の女性像

中国の女性たちは、父権社会の中で伝統的な礼教を受け、支配される位置にある。女性の役割はほとんど家の奥で「内言不出、外言不入」の環境の中にある。女性の唯一の進路は結婚することだった。それは義務であり、「女は結婚応募者」の身分であった。結婚というものは、愛情に基づいて家庭をつくるものではなく、お互いの家庭間の見栄の張り合いなのである。だから、そういう結婚は、最初から不幸な運命に決まっていたようなものである。

『金鎖記』中の女の人物たち、三若奥様の蘭仙、長白の奥様芝壽、姜氏家族の二若奥様の七巧、彼女たちみんなの結婚生活は不幸であった。蘭仙の旦那は仕事が嫌いで、いつも色街まで遊びに行く。芝壽の旦那は長白であり、いつも自分の母親と一緒にアヘンを吸っている時間を過ごしている⁽⁹⁾。

以上の女たちを比較すると、七巧の運命が一番哀れである。両親のいない、油屋の出身で、彼女の兄がお金のために、妹の彼女を体の不自由な男と結婚させた。物質に基づいた結婚は七巧の不幸な運命をもたらした。この結婚は、鎖のように、七巧を束縛している。彼女は肉体的にも、精神的にも満足ができなかった。彼女は夫のことについてこう言った。「あの人の体にじかに触ったことある？ふにゃふにゃして、重くって。ちょうど痺れた足に触ったときの、あの感じよ……病気じゃない体がどんなにいいか……」⁽¹⁰⁾。

健康な若い女性が、あの「生命のない肉体」⁽¹¹⁾と結婚、生理的な満足は得られなかった。二人の子どもを産んだのだが。精神面だけでも心を通わせることもできなかった。夫との共通の趣味はアヘンを飲むことである。七巧はアヘンを利用して、自分の神経と感情に麻酔を打つつもりであったのかもしれない。彼女にとって、婚姻は監禁のような状態であり、それからの脱獄は不可能であった。当時の中国社会において、伝統的な礼教に基づき、女性は「従一而終」という節を守り、再婚しないという道徳的な観念が強く、別居や離婚は考えられないことであった。だから、結婚生活の中に生きている七巧の怨気と苦悶を解消することができなかった。

一度は、道徳礼教に反抗し、貞節に無視して、この「鎖」から脱出したいと思うこともあった。七巧は夫の三番目の弟である季沢のことが好きになった。でも、彼は、彼女の感情を拒否した。感情を流す場所がなく、寂しい気持ちになっていた彼女は、愛情のない、不幸な結婚の中に生きなければならず、だんだん愛情の気持ちが薄くなってしまった。

十年後、七巧の夫と義理の母親は亡くなった。季沢は「利益」のために、彼女を訪問し、愛情の表現をした。十年間愛し続けていた七巧は、有頂点になった。「七巧はうつむいたまま、めくるめく光に身を洗っている。かぼそい喜び……この何年かというもの、あたしと季沢はかくれんぼをしているみたいだったが、近くにはなれなかった。今日という日が来ようとは！」⁽¹²⁾

しかし、季沢はお金のために、自分に愛情を表現したと知り、七巧は大変苦痛を感じ、愛情は憎悪になって、季沢に打ちかかった。ずっと待っていた彼女は、彼からの偽りの愛を受け入れることができなかった⁽¹³⁾。

七巧は結婚の失敗により、不幸な生活となった。結婚以外での恋愛もできなくなってし

まった。愛情を味わったことがなかったため、騙された愛情は復讐になってしまった。張愛玲が書いたのは感情と結婚の鎖に束縛され、逃げられなくなってしまった女性像なのである。

2. 悪女としての母親像

中国文学史における母親の姿と女性の意味とは異なったもので、母親への尊敬と崇拝の感情を一般的な中国人作家は持っている。物語での母親は、家族のため、子どものため、深い愛情と強い気力を持って、子どもを養育していく。そして、彼女たちの家族や子どものために自己を犠牲にして悔いなく生きていく人生は、彼女らの貢献として賞賛されてきた。この母親像は中国数千年間に及ぶ父権社会の中に存在し続けてきた。

これと違って、張愛玲の作品の中の母親像は「悪魔の母親」であった⁽¹⁴⁾。彼女は伝統的な母性愛のある母親像について、エッセイの中で、直接不満を表現した。「母性愛を賛美した人は、男性としての息子だった；もし女性自身が母性愛を肯定したら、自分が重要と思わない、男性は彼女のこの部分しか尊敬しないでしょう」⁽¹⁵⁾。

女性作家としての張愛玲は、母性愛を標榜していなかった。彼女の作品を分析して見ると、夫婦関係の不完全さの原因は不完全な母親にあるというのである。特に母親は、不幸な夫婦関係の中で重要な役割を演じていた。

母親は父親より、子どもと緊密な関係を持っている。張愛玲の書いた母親の物語において、父親は常に主人公が若い時に亡くなっていたり、あるいは登場しない、または父親としての権威がない。たとえば、体が不自由であるなど。だから、父親が不在の家庭の中で、母親は重要な地位を占めてきた。そして、そういった家庭環境の中で、母親一人だけで主人公を育てた場合が多い⁽¹⁶⁾。

父親不在の家庭で、母親は悪魔のような、残酷な統治者になってしまった。暖かい、親切な慈愛を持つ母親は神話のような幻想であった。

『金鎖記』においての登場人物はその典型であった。七巧の夫であり、父親としての二爺は、最初から最後まで顔を出したことがないし、発言も全然なかった。彼は、産まれてつき骨結核症があって、終年ベッドの上で横になっている。不自由な身体は、夫と父の存在がないことの象徴である。

二爺が死んだ後、苦難を十分になめつくした七巧の夫への大きな怨恨は、自分の息子の長白と娘の長安に転嫁した。長男の長白を掌握するために、彼にアヘンを吸うことを勧め

た。

……七巧は眼を細めて長白を見た。この何年か、七巧の人生にとって、男は長白ひとりしかなかった。……さらにいまは、この半人前さえ自分のものにはできない——彼は結婚したのだから。……七巧は片足を息子の肩の上に乗せ、しきりにその首をこづきながら低い声でいった。

「この親不孝もの！いつからこんな親不孝になったんだい？」

長安がそばで笑って、「お嫁さんをもらったから、母さんのことなんか忘れたのよ！」

「おだまり！うちの白さんはそんな人間じゃないよ！あたしだってそんな息子を育てた覚えはないやね」

長白はただ笑っている。七巧は横目で息子の様子を見定めながら笑って、

「おまえが以前と変わらないっていうなら、その証拠に今夜ひと晩中アヘンを焼いていくれ！」

……七巧はまたもや手をかえて、こんどはアヘンを吸うようすすめた。長白はそれまでも少しやっていたが、中毒になってはいなかった。それがいまでは、たくさん吸うようになった。それとともに気持ちも落ち着いてあまり外出しなくなり、家で母親や納められたばかりの妾のそばにいたのだ⁽¹⁷⁾。

アヘンを吸うという文化現象は張愛玲の小説の中に頻繁に出現している。この『金鎖記』の例は典型である。最初、ヨーロッパの植民主義者が様々な方法で中国の封鎖したドアの中への進出を企てていたが、なかなか成功できなかった。その後、中国国内でアヘンという物が見つげられた。それは外国人の中国への侵略の証拠である。でもなぜ中国人は、自分がこの麻薬に沈酔するだけではなく、他者にも誘っていくのであろうか。これは中国人の民族性の弱い面を見せている。魯迅と異なり、張愛玲は女性というものに、中国人の民族性と人間性の複雑な面を分析し、表現している。

ここでアヘンを吸うということは七巧が自分の子を支配するという特有な武器である。彼女は、アヘンを吸うことを夫からの影響により始めた。その後、自分だけではなく、息子の長白に勧め、更に、娘の長安にも勧めた。

七巧は子どもに幸福を与える代わりに、苦痛や恨みを与えた悪女の母であった。

張愛玲の作品の母親は悪魔のようであり、その母親の統治は、母性の温和、仁慈な統治ではない。母は父権社会の残酷な方法を使って、他人・子を支配する権力を利用し、様々

な方法を試み、子を肉体と精神の面から虐待する。これは女性である母が父権社会に復讐する唯一の方法と考えられている⁽¹⁸⁾。

凶悪な母と弱気な息子の関係は、中国的な家庭構造である。張愛玲の作品の中の母親は、息子に対して異性への欲望の禁止や抑圧などはしていない。逆に、気前よく、息子に女性を提供している。息子の「娶妻納妾」という人生の課題は中国の母親の義務であり、この権力を上手く利用することは、息子を独占する方法であるのかもしれない。母は常に結婚した息子と息子の嫁との間に存在する。七巧は息子を利用して、嫁を迫害していく。嫁は「これは狂気の世界。夫は夫らしくない、姑は姑らしくない。彼らが気違いでないなら、自分が気が狂っているのだ。」⁽¹⁹⁾と言っている。母親は、息子の嫁あるいは他の女を道具として、息子の殺害あるいは去勢を実現する。

3. 母と娘の関係

『金鎖記』における悪女の母親の他、母と娘の関係、特に二人の間の衝突には、悲劇性が最も深刻に顕われていた。

氷心の書いた幸せな母と娘の関係とは異なって、張愛玲の作品においての母娘関係は、お互いに、恨みと怨気を持っている⁽²⁰⁾。母は、実現できなかった自らの欲望と自我の充足の追求を娘にも与えようとはしなかった。

七巧の娘である姜長安は生まれた瞬間から、全て母親の支配の下に生きている運命であった。感情上で不幸な母親は、自分より娘の方が幸せになるのを認めようとせず、寂しさ、恐怖感だけを与えていく。娘は母の不幸な人生の犠牲者になった。これは張愛玲が書いた女性の悲劇的な運命と人生なのである。狂気である母親の影の下で生きている娘の人生はとても悲惨である。彼女も光のない存在として歩いていかざるをえない。

娘としての長安は、初めて読者の前に登場した時、この状態であった。

七巧の娘の長安は、年こそ十三、四になっていたが、体が痩せて小さいので七、八くらいにしか見えなかった。年越しのとき、ひとりの子は青い緞子まがいの綿入れを、もうひとり薄緑色の綿入れを着たが、着物が厚すぎて両腕がピンと張ってしまった。似たような薄っぺらなふたつの青白い顔が並んで立っているさまは、まるで張り子の人形であった⁽²¹⁾。

張り子の人形のような長安は、誰にでも操縦できる。普通の子どもより成長が遅れていて、体が小さく、母親は操縦し易い。そのため、長安は自らの人生を創り出すことができなかつた。

長安は母親の七巧から、よく説教を受けた。「世の中の男はみんなどいつもこいつもろくでなしさ。自分でもよく気をつけるんだよ。みんながおまえのお金を狙ってるんだからね」⁽²²⁾。

娘が勝手に好きなところへ行けないように、十三歳というすでに遅すぎる年齢で纏足した。母は娘を肉体だけではなく、心の奥まで全て支配していた。

長安は女子学校に入学した。それは、教育を受ける目的ではなく、大家族中で、子どもの間での競争の道具として利用されただけだ。しかし、学校生活中の長安は暫く悪魔の母親のコントロールから脱出して、本来の元気をとりもどした。

長安は半年もたたぬうちに顔には赤みがさし、腕や足もひとまわり太くなった⁽²³⁾。

でも、母親としての七巧は、また自分の手で娘の未来を葬り去った。長安は母親に無理なことをされたので学校を辞めた。とても悲しくなった長安は「ハーモニカで『遙かな昔』を吹き、音はきれぎれになって、まるで赤ん坊が泣いているようだ」⁽²⁴⁾。

長安はまだ形に成っていない胎児のように、母の子宮の中で死んでいた。それでも満足せず、七巧は彼女をアヘンに誘った。

長安は二十四のときに伝染性の下痢を患った。七巧は医者や薬の世話にならさせず、アヘンを少し飲むようすすめただけだったが、それで痛みはぐんと退いた。病気が治ってみると、長安はやはり中毒になっていた⁽²⁵⁾。

長安は、義理の妹から結婚相手として世舩を紹介された。そして、彼女は初めて恋愛をした。

ガラス窓のうえに、唐突にちいさなネオンの花が咲いた——むかひの店のネオンが映ったのである。緑の芯に赤い花卉。ナイル河の祭神の蓮の花か、またはフランス王室の百合の紋章か……⁽²⁶⁾

秋の陽を浴びながら並んで公園を歩いたが、ほとんど話はしなかった。目の端にちらつくのは相手の着物や動く足、女の脂粉の香り、男の煙草の臭い。この単純で愛すべき印象こそ、ふたりのまわりにめぐらされた欄干だ⁽²⁷⁾。

世舫と婚約をした彼女はアヘンを止めていたため、時々笑顔ももどり、本当の人間の幸せをかみしめてる最中、無情の母親から結婚の反対をされ。彼女の微弱な愛情は、無意識のうちに、母親の心の中に嫉妬心を引き出した。七巧が自分の満足を得ない怨気は、娘の幸福を奪い取った。

彼女はアヘンをやめているため、肉体的な苦痛やさまざまな刺激に両面から攻められて、とうに堪えきれなくなっていたのを、必死の思いで堪えてきた。それがいまとつぜん体中の骨格がばらばらになったような気がした。……あの人に言いわけする？彼は兄さんとは違う。実の子でなければ、ぜったいにこの母親のやり口を理解することなんてできない。一生会わずにすめばそれでいいが、遅かれはやかれ七巧と顔を会わせることになる。これは避けられないことだ。千年賊を防ぐものはいない——この母のことだから、どんな手を使ってくるかはわかる。遅かれ早かれ騒動がおき、遅かれ早かれ決裂することになるだろう。思えば、いまが人生で最もすばらしいときだ⁽²⁸⁾。

長安は熟しきった林檎のように、停まらなく、下に墜落していく。土の奥に到着したが、香りがまだ残っている。しかし、彼女は自分の愛情をなくしたくなかったので、婚約を解消しても、結婚相手の世舫と外出していた。時々、幸せである自分を実感した。しかし、母の七巧は彼に食事をごちそうする時に、「あの娘だったら、もう二本ばかり吸ってから来るよ」⁽²⁹⁾と軽く言ってから、あの二人の関係は完全に終わった。長安は「他人に忍び難いような尾ひれをつけられるよりは、自分で早いうちに決着をつけてしまったほうがよい。美しい物寂しいてぶり……長安は自分はきっと後悔するであろうと思う。後悔するであろう」⁽³⁰⁾。

彼女の人生はまた張り子の人形に戻った。母親の為に自分の愛情を殺してしまった。悪魔の母親は自分の娘の幸福を奪い取った。

張愛玲によると、血縁のある母と娘の関係は、女性と女性の関係である⁽³¹⁾。嫉妬心と恨みに満ちた母は娘を支配し、迫害する。娘は母との葛藤から逃走することもできない。被害者である娘は母と同じ人生を選ばなければならない。母のようになりたくない願う長安は母に強い嫌悪を覚えると同時に、母の不幸にも同情した。いくら娘が母への嫌悪を覚えていても、結局、母親の道に導き入れられた。

彼女（長安）は、次第に一切の向上心を捨て、自分に甘んじるようになってきた。事

を荒立てることをおぼえ、小細工を弄し、いえの切り盛りにくちを出した。たえず母親と衝突し、物言いや立ちふるまいがますます母親に似てきた。……「その家にはその家の悩みがあるのよ、ねえさん——その家にはその家の悩みが！」そのたびに、誰もが七巧に生き写しだと言う⁽³²⁾。

娘は母の不幸の犠牲者になってしまった。母はもう一人の自分を複製することに成功した。ここで、娘が母親のようになったということは、一つの循環である。人生はこの繰り返してであると張愛玲は小説の最後に結論として結んだ。

三十年前の月はどうに沈んでしまい、三十年前の人も死んでしまった。だが三十年前の物語はまだ終わっていない——終われない⁽³³⁾。

IV. おわりに

張愛玲は、女性作家として、中国現代文学史において高い評価を受けている。「五四」新文学運動から出てきた女性作家たちと異なり、彼女が書いた女性像は、家庭に生きる中国古来からの普通の女たちだった。彼女たちは、時代の変革の波に影響されず、未来への憧憬がなく、数千年間培われてきた心の地獄の中から脱出することができなかった。そして、封建意識のままに、男性の付属品としての存在であった。

1943年秋に書いた『金鎖記』という中編小説は、張愛玲の代表作となる。愛玲は、主人公である曹七巧の生活のいろいろな側面から、女性の悲劇を見つめている。彼女は複数の役を演じていて、家庭での妻として、母親としての役割及び母と娘の関係を経て、女性の疎外された人間性とその複雑な心境を深刻に表現し、特に、人間性の暗い面を描いていく。曹七巧は被害者である女の奴隷であると同時に、加害者としての奴隷主でもある。夏志清教授は、『中国現代小説史』(1961年)という本の中で「『金鎖記』は50ページの長さだが、現代文学の傑作の一つとして、中国古来から現代までの小説中で一番素晴らしい中編小説であると思う。」⁽³⁴⁾という評価をあたえている。張愛玲は、優秀な女性作家であり、彼女が書いた作品は中国の文化遺産として、今後も読み継がれていくと思う。

《注》

- (1) 於青編著『張愛玲を探す』中国友誼出版公司, 1995年, 132~133頁を参照。
- (2) 『張愛玲記念文集：華麗と蒼涼』(香港) 皇冠出版社, 1996年, 127頁より引用。
- (3) 前掲『張愛玲を探す』, 134頁を参照。
- (4) 前掲『張愛玲記念文集：華麗と蒼涼』, 287頁より引用。
- (5) 張愛玲著, 池上貞子訳『傾城の恋』平凡社, 1995年, 224~245頁より作成。
- (6) 於青著『張愛玲伝』世界書局, 1993年を参照。
- (7) 中国文芸研究会編『図説：中国20世紀文学—解説と資料』白帝社, 1996年, 88頁を参照。
- (8) 『金鎖記』の最初発表のは1943年11月10日の『雑誌』(呉誠之主編)に発表した。唐文標主編『張愛玲資料大全集』時報文化出版事業株式会社, 1993年, 373頁を参照。
- (9) 陳炳良『張愛玲の短篇小説論集』遠景出版事業公司, 民国72年, 135~136頁より作成。
- (10) 張愛玲著, 池上貞子訳『傾城の恋』平凡社, 1995年, 31頁より引用。
- (11) 同上書, 45頁より引用。
- (12) 同上書, 56頁より引用。
- (13) 夏志清著『愛情・社会・小説』台北純文学出版社, 1970年, 44頁より引用。
- (14) 王德威著『母親, 同時に女性』『中国小説：晚清から現代までの中国小説』, 台北麦田出版社, 1993年, 323頁を参照。
- (15) 張愛玲著「踊りについて」『流言』台北皇冠出版社, 1968年, 176~177頁より引用。
- (16) 水晶著『張愛玲の小説芸術』台北大地出版社, 1978年, 131頁を参照。
- (17) 前掲『傾城の恋』, 74~75頁より引用。
- (18) 阿川『乱世才女張愛玲』陝西人民出版社, 1993年, 84頁を参照。
- (19) 張愛玲著, 池上貞子訳『傾城の恋』平凡社, 1995年, 78頁より引用。
- (20) 孟悦, 戴錦華「張愛玲：蒼涼的莞尔一笑」『浮出歴史の地表』河南人民出版社, 1989年, 252~255頁より作成。
- (21) 前掲『傾城の恋』, 62頁より引用。
- (22) 同上書, 65頁より引用。
- (23) 同上書, 68頁より引用。
- (24) 同上書, 69頁より引用。
- (25) 同上書, 80頁より引用。
- (26) 同上書, 85頁より引用。
- (27) 同上書, 87頁より引用。
- (28) 同上書, 64~95頁より引用。
- (29) 同上書, 99頁より引用。
- (30) 同上書, 95頁より引用。
- (31) 前掲「張愛玲：蒼涼的莞尔一笑」『浮出歴史の地表』, 256頁より引用。
- (32) 前掲張『傾城の恋』, 71頁より引用。
- (33) 同上書, 104頁より引用。
- (34) 前掲『張愛玲記念文集：華麗と蒼涼』, 123頁より引用。